

◆ 事業名 将来の国宝・重要文化財の保存・修復に向けて国産漆生産のリスクを考える

事業団体	日本漆アカデミー	■事業の目的
活用したふるさと文化財の森	浄法寺漆林	国宝・重要文化財の保存・修復に関わる講演会、見学、国産漆生産リスクの研修会及び漆サミット2021を行うことにより、将来の国宝・重要文化財の保存・修復に向けて国産漆生産のリスクを考え、国産漆の増産及び安定供給につなげる。
活用したふるさと文化財の森センター		
活用した文化財建造物	静岡浅間神社、久能山東照宮	

■事業の内容

- (1) 国宝・重要文化財の保存・修復に関わる講演会
新型コロナウイルス感染症の拡大により、10月2日(土)午後に国宝・重要文化財の保存・修復に関わる講演会をオンラインで行った。講演会では、「静岡の漆文化ー漆の地産地消を目指すゼロからの挑戦ー」を静岡市経済局副主幹の関本早苗氏が、「静岡の漆文化ー静岡の漆塗り社殿ー」を静岡文化芸術大学准教授の新妻淳子氏が、「登呂遺跡出土の朱漆の琴について」を静岡市登呂博物館主査の梶山倫裕氏が、「樹木の力で地域を変える」を一般社団法人まち・文化研究所代表理事の森田みか氏が講演した。
- (2) 漆サミット2021
漆サミット2021は規模を縮小し、11月7日(日)に盛岡市の岩手教育会館で開催した。漆サミット2021の講演会「ウルシ林造成に向けて国産漆生産のリスクを考える」では、「ウルシの植栽適地」を森林総合研究所主任研究員の小野賢二氏が、「萌芽更新によるウルシ林の再生」を石川県林業試験場長の小谷二郎氏が、「ニホンジカによるウルシ樹皮剥皮」を森林総合研究所四国支所長の岡輝樹氏が講演した。昼食をはさんで「漆」をめぐる学際的な最新の研究成果等に関わる6件のポスター発表や漆器など4件の作品展示を行った。その後、講演会「国産漆を活かした地方創生と漆文化の普及啓発」では、「日本一の漆産地岩手県における地方創生の取組について」を岩手県地域産業課長の竹花光弘氏が、「山と漆プロジェクト事業について」を奈良県曽爾村企画課課長補佐の磯野千章氏が、「彦十蒔絵の取り組み」を彦十蒔絵代表の若宮隆志氏が、「人と自然の関わりから生まれる漆の造形ー自身の作品と木曾漆器との共同プロジェクトを事例としてー」を筑波大学芸術系准教授の宮原克人氏が講演した。



漆サミット2021



漆サミット2021での作品展示



見学した静岡浅間神社



見学した久能山東照宮

◆ 事業名

(3) 国宝・重要文化財の保存・修復の見学

10月2日(土)に国産漆生産リスクの研修会、3日(日)に国宝・重要文化財の保存・修復の見学を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大のために延期し、規模を縮小して国宝・重要文化財の保存・修復の見学を12月3日(金)に、国産漆生産リスクの研修会を12月4日(土)に変更し開催した。

国宝・重要文化財の保存・修復の見学では、静岡浅間神社中澤聡権宮司と天峰建設株式会社増田純文化財課長から改修した静岡浅間神社楼門等について、一方、久能山東照宮落合偉洲宮司から改修した久能山東照宮本殿等について解説いただき、国宝・重要文化財の保存・修復等の見聞を広めた。

(4) 国産漆生産リスクの研修会

国産漆生産リスクの研修会では、二ホンジカ被害防除先進地の静岡市腰越のウルシ植栽地で萩原林業株式会社萩原康代表取締役から二ホンジカの防除資材等について解説いただき、防除資材の経費や設置方法等を議論し、二ホンジカの防除等について情報を共有した。その後、静岡市立登呂博物館で登呂遺跡の漆塗り製品等を見学し、弥生時代における漆塗り製品等の見聞を広めた。

■事業の成果

● 国宝・重要文化財の保存・修復に関わる講演会、国産漆生産リスクの研修会及び漆サミット2021を行うことにより、将来の国宝・重要文化財の保存・修復に向けて国産漆生産のリスクを考え、国産漆の増産及び安定供給に向けてウルシ生産者等に普及啓発することができた。

● 新型コロナウイルス感染症の発生が抑えられている中、国宝・重要文化財の保存・修復の見学により、静岡浅間神社と久能山東照宮を訪れ、保存・修復された国宝・重要文化財を見学した他、静岡浅間神社や久能山東照宮から話を伺い、保存・修復の大切さや課題等を学ぶことができた。

■事業の実施後の課題

● 国宝・重要文化財の保存・修復や漆器制作等に不可欠な国産漆について造成技術に関わる情報が不足しているため、ウルシ林の造成や管理に関わる情報をウルシ生産者等に普及する必要がある。また、保存・修復に関連し、国産漆特性の評価や漆掻き職人の漆掻き技術の継承は今後、取り組む重要な課題である。

● 新型コロナウイルス感染症の発生を考慮しながら、講演会や見学等を行い、一般の方等に広く国宝・重要文化財の保存・修復等を普及啓発を図ることは大変難しい課題である。

■今後の展開

● SNS等も使い、オンラインでの聴講も考慮し、複数の箇所で講演会やセミナーを行う他、ワークショップ等を行うことにより、一般の方等に国宝・重要文化財の保存・修復に不可欠な国産漆を普及啓発する予定である。

● 国産漆の増産や安定供給のため、ウルシ林造成や管理及び養生掻き等に関わる漆掻き技術の講演会や研修会等を開催する予定である。

◆ 茅葺き文化・文化財保護に関する普及啓発事業

事業団体	静岡県富士宮市根原区	■事業の目的
活用したふるさと文化財の森	朝霧高原茅場	・修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発
活用したふるさと文化財の森センター	なし	・修理用資材の確保に対する支援体制づくり
活用した文化財建造物	なし	

■事業の内容

- (1) 富士山茅葺きフォーラム及びポスター展(延100名程度の参加を見込む) **【コロナの関係により中止】**
○富士山茅葺きフォーラム◆日時：令和3年10月3日(日)13:30～15:30 ◆会場：朝霧高原茅場内茅倉庫 ◆フォーラム講演：「茅葺きの大いなる可能性 一世界の茅葺きに目を向けてー」筑波大学名誉教授 安藤邦廣氏・(一社)日本茅葺き文化協会 上野弥智代氏 講演資料A4版32頁カラー印刷400部制作 ○ポスター展◆日時：令和3年10月3日(日)10:00～15:30 ◆会場：朝霧高原茅場内茅倉庫 テーマ「世界の茅葺きから見た茅葺きの可能性」ポスターパネルA1サイズ10枚制作展示 ◆協力：朝霧高原活性化委員会(朝霧高原茅場の運営組織) ◆後援：富士宮市・富士宮市教育委員会
- (2) 茅刈り人養成講座と茅葺き体験(延100名程度の参加を見込む) **【コロナの関係により中止】**
○茅刈り人養成講座◆日時：令和3年12月11日(土)10:00～14:30 ◆会場：朝霧高原茅場(実技講習)及び茅場内茅倉庫(学科講習) 実技講習講師 杉寄靖司(富士茅葺き建築茅吉代表) 学科講習講師 木村悦之(東京農業大学グリーンアカデミー講師・朝霧高原活性化委員会) ○茅刈り体験講座◆日時：令和3年12月12日(日)9:00～12:00 ◆会場：朝霧高原茅場 体験指導 杉寄靖司(富士茅葺き建築茅吉代表) 木村悦之(東京農業大学グリーンアカデミー講師・朝霧高原活性化委員会) ○茅葺き体験講座◆日時：令和4年1月15日(土)9:00～15:00、令和4年1月16日(日)9:00～15:00 ◆会場：朝霧高原茅場内茅倉庫 体験指導 杉寄靖司(富士茅葺き建築茅吉代表) ◆協力：朝霧高原活性化委員会(朝霧高原茅場の運営組織) ◆後援：富士宮市・富士宮市教育委員会

■事業の成果

- フォーラム開催の告知用ポスター、チラシの配布段階で新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言を受けて事業計画を中止したため成果なし。

■事業の実施後の課題

- 事業計画を中止したため課題なし。

■今後の展開

- 中止した事業内容について次年度の実施を目指す。

◆ 筑波山麓の茅の育成・採取・加工に係る普及啓発事業

事業団体

一般社団法人日本茅葺き文化協会

活用したふるさと文化財の森

高エネルギー加速器研究機構茅場

■事業の目的

- 修理用資材の確保に対する支援体制づくり
- 修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発
- 修理用資材の育成・採取・加工に関する活動
- 修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保
- 修理用資材の育成・採取・加工に係る他組織との連携、情報共有

■事業の内容

(1) 茅(ススキ)の育成・採取・加工等の研修プログラム

①茅刈りワークショップ 日時 2021年12月18日(土) 会場 高エネルギー加速器研究機構茅場 参加者 58名

参加者は、筑波大学の教員と学生を中心に、首都圏より、建築士、大工、行政関係者、茅葺きの新たな住み手などで、平均年齢は37歳であった。今回の茅刈りワークショップでは、現在この地域で主として行われている刈り払い機を用いた機械刈りと、かつて地元で長く行われてきた鎌刈りの両方の茅刈りを行なった。鎌の種類や使い方、よい茅の見分け方、刈り方、束の大きさ、束ね方、茅の単位、運搬について学んだ。機械刈りは、刈り払い機で刈り取る人→茅を寄せる人→束ねる人→運搬の手順を分業で行うもので、参加者らは2人1組となり、全体で3班に分かれて作業を行なった。あわせて、筑波大学と共同研究でリン酸の施肥実験を行なっている区画の茅刈りも実施した。

②茅葺き・茅ごしらえワークショップ 日時 2022年2月26日(土)～27日(日) 会場 NPO 八郷かや屋根・みんなの広場 茅葺き民家 参加者 44名(のべ62名)

参加者は、20代が最も多く、遠くは香川大学から学生が参加。茨城県、栃木県など関東甲信越地域から、6組の茅葺き所有者や住み手が参加した他、建築士、大工などが参加。地元の茅手(茅葺き職人)を講師に、茅葺き屋根の解体から、古茅の選別と再利用、こまるき(茅ごしらえ)、下地の竹割り、軒付けとして水切り茅を並べて押しぼこの縄結び、差し茅による屋根葺きの一連の作業を行なった。作業は3班に分かれ、屋根葺き、手元・地走り、この茅葺き民家の周りで肥料をつくり、循環的、持続的に行われている里山農業の田畑、足場のスギ丸太や杉皮を採取した裏山の見学を交代しながら全てを体験した。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義

(1)茅葺き文化講座1 日時 2021年12月18日(土) 会場 高エネルギー加速器研究機構内会議室 参加者 30名

(2)茅葺き文化講座2 日時 2022年2月26日(土) 会場 NPO 八郷かや屋根・みんなの広場 茅葺き民家座敷 参加者 50名

座学、茅刈り、茅葺きの一貫した研修を行うプログラムとして、茅刈りワークショップとあわせて、筑波大学生命環境系の川田清和助教が「茅と茅場」の講義を、茅葺き・茅ごしらえワークショップとあわせて、茨城大学名誉教授の中島紀一教授が「里山農業と茅葺き」の講義を、筑波大学名誉教授の安藤邦廣代表理事が「火山列島日本の茅」の講義を行った。



茅刈りワークショップ



茅葺き・茅ごしらえワークショップ



茅葺き文化講座1



茅葺き文化講座2

■事業の成果

(1) 茅の育成・採取・加工等の研修プログラム

①茅刈りワークショップ

- 1 茅採取技能の理解 筑波山麓地域の茅採取技能について、屋根葺き材料として良質な茅を採取するための適期、選別方法、採取の方法、束ね方、束の大きさ、乾燥方法、茅場の環境とその維持管理について学ぶことができた。
- 2 茅刈りの担い手育成 学生など20代の参加者が多く、茅場の環境や維持管理についての関心が高まっていることがわかった。茅刈りにも地域的に多様な技術と知恵があることを理解するきっかけとなり、これからの担い手育成につながる事が期待できる。
- 3 収穫量 ワークショップ参加者や地元保存会による2日間の茅刈り全体で、117駄、702束(5尺締め)の茅刈りを行うことができた。

②茅葺き・茅ごしらえワークショップ

- 1 筑波山麓の茅葺きの技と材料についての理解 屋根の解体から差し茅までの一連の茅葺き作業を体験することで、かつて筑波山麓の茅葺き民家の所有者や近所や親戚の共助で行なってきた茅葺きと、差し茅による定期的な屋根の補修方法について学ぶことができた。
- 2 茅の循環的利用の理解 茅刈りをした茅を屋根に利用、屋根から下ろした古茅の再利用、茅葺きとして再利用するもの、肥料等に再利用するものの選別と方法についても体験研修を行い、さらに現場が有機農家であることから、古茅が肥料になる過程を年数ごとに見ることができ、農業と茅、茅葺きの循環的利用について学ぶことができた。
- 3 茅の加工の習得 筑波流の茅葺きの特色のひとつである、茅の加工として、切り茅をこまるきする(小さく束ねる)胴切りなどの茅ごしらえは、近年、茅葺き所有者で行うことが難しくなっている。これらの茅ごしらえを体験研修することで、担い手育成の一助とすることができた。

◆ 筑波山麓の茅の育成・採取・加工に係る普及啓発事業

■事業の成果

- 4 担い手育成 茅葺きおよび茅刈り研修に参加した大学生のうち1名は卒業後の進路に茅葺き業界を志望し、担い手育成につながっている。
- 5 技能の継承と技術交流 ワークショップの指導と指導補助として、茨城県内の職人同士や職人見習い、他地域の茅葺き職人らが共に屋根葺きを行うことで、技術交流と筑波流茅手の技能の継承および連携の契機とすることができた。
- 6 茅葺き所有者同士のネットワーク構築 関東圏から6組の茅葺き所有者、茅葺き利用者が参加し、互いの茅葺きの葺き替えや茅刈りの手伝いを行う新たなネットワークができた。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義（茅葺き文化講座）

筑波大学生命環境系 川田清和助教「茅と茅場」

- 1 ススキがつくる植物社会 ススキクラスの二次草原には、九州阿蘇などに分布するメガルカヤ-ススキ群団、本州の冷温地域に分布するノギリソウ-ススキ群団（仮）などが見られ、筑波山麓の茅場はトダシバ-ススキ群団に属すると考えられる。
- 2 茅場の生態系サービス 茅場の生態系サービスは、屋根葺き材、馬の餌、堆肥、薬草などの供給、伝統文化の継承、生物多様性、二酸化炭素の吸収、水源涵養、レクリエーション、など多様である。茅の利用は結果的にさまざまな生態系サービスを派生している。”OECMs (Other Effective area-based Conservation Measures)”「その他の効果的な地域ベースの保全対策」とは、日本の里山のような「人の適切な営みによって、結果、自然が守られている場」の重要性を提起した概念。このOECMによって茅場は注目されている。
- 3 高エネ研茅場の修復実験（途中経過報告） 近年、茅の質と収量が落ちていることから、高い生産性で高品質な茅を生産でき、生物多様性の維持もできる茅場の修復方法を検証することを目的に、高エネ研の茅場においてケイ酸カリウム肥料の施肥実験を行なっている。（1）ケイ酸カリウムによってススキの成長は促進する傾向があった。その理由として、ケイ素成分によってススキの窒素利用の効率が改善された可能性がある。（2）ケイ酸カリウムを入れた場所で、種多様性は低下する傾向があった。ケイ酸による多様性維持効果よりもススキの成長に伴って増加した種間競争による負の影響が大きかったと考えられる。

茨城大学名誉教授 中島紀一「里山農業と茅葺き」

- 1 自然と共にある暮らしとしての農業 今回の茅葺きワークショップの場であるやまだ農園の農業のあり方は、日本の有機農業の最先端のチャレンジである。作業的な農業を目指すのではなく、地域とつながり、地域の自然に支えられて地域社会を広げていく、暮らしとしての農業を目指している。そこに茅葺きも位置づこうとしている。
- 2 茅場は持続的で力のある生態系 茅場は茅（ススキ）自身の優れた植物の力と、村人らの管理の継続で形成された、持続的で力のある生態系である。
- 3 茅刈り、茅葺きは、もやい仕事 茅葺きを30年周期で葺き替えるとすれば、30軒で順番に茅刈りと茅葺きを行うことで、茅場の植物学的な能力を維持できる社会的仕組みをつくることができる。茅刈り、葺き替えのもやい仕事により、村という社会のコミュニティが形成される。
- 4 土づくりをする農業と茅葺き 茅および地域の自然に支えられ、村に支えられた茅葺き屋根の仕組みの中で生活することによって農家の暮らしも豊かになる。茅は窒素の少ないセルロースという分解しない有機物として、後に残る土づくりに特別の意味を持っている。
- 5 茅葺きと蜂 蜂は訪花昆虫といい、生態系コントロールで大きなプラスの役割を果たす。その拠点が茅葺き屋根である。

筑波大学名誉教授 安藤邦廣「火山列島日本の茅」

- 1 三宅島にみるススキ草原 火山の噴火の後、何もなくなった黒い大地からまずススキが生え、その後ヤシャブシが出現し、やがてタブノキが出現する。タブノキに覆われると、ススキはなくなる（極相）。ススキの草原を保つには、タブノキは切り、毎年ススキを刈り取り、火入れをすることが必要。火入れは毎年火山の爆発を再現しているようなもの。ススキが大地を再生させ、農地をつくっていく。
- 2 三宅島の農業 島の主な農産物であるアシタバは、ススキで囲って風を除け、ススキを肥料として施して育てる。また、ヤシャブシの緑陰で育てるなど、植生遷移の途中をうまくコントロールしながら島の生活を営んでいる。
- 3 火山列島日本の最大の恵みである茅（ススキ） ヨシは世界中にあるが、ススキで屋根を葺いている国は少ない。日本の他に、フィリピンとインドネシア、韓国の済州島、といずれも火山の島である。刈り取りと野焼きを繰り返すことによって、ススキは永遠に続いていく。
- 4 野焼きは13000年前に遡る 日本にはススキの大草原とそれによってできる黒ボク土がある。茅葺きは農耕と共に弥生時代から始まったと考えていたが、近年の研究によって、13000年前、縄文時代にはすでにススキの草原が焼かれていたことがわかってきた。大型哺乳類の狩猟のためではないかと考えられ、火山の恵みによるススキの力を縄文人も弥生人もうまく利用していた。
- 5 これからの茅葺き 茅葺きは人間の営みの大きな循環の一つであることを理解し、茅葺きとは何かを再考する。農業と茅葺きの連関を取り戻すことがとても大切なことではないか。

■事業の実施後の課題

- 1 茅場の再生、生物多様性の維持と持続的生産へ向けて 茅場および茅の質と生産量の低下を改善する可能性が明らかになった。高い生産性で高品質な茅を生産でき、生物多様性の維持もできる茅場の再生のため、継続して以下の研究開発、検証を行うことが必要。①茅となる植物体が5月から6月にかけて大きくなる方法の開発 ②春先に種多様性を高める生育環境の検証
- 2 地域内の茅場の育成 現在、筑波山麓の茅葺きの材料調達、高エネ研の茅場に依るところが大きい。しかしながら、近年、茅の質と生産量の低下の課題があることから、この茅場だけに集中するのではなく、地域内に複数の茅場を確保することが望ましい。地域内にある耕作放棄地などのススキ原やかろうじて残されている茅場で継続して刈り取りをすることで、茅場を再生、育成していく。

■今後の展開

- 1 茅場の再生と持続的生産 全国的に、質と量ともに年々茅の生育状況が悪くなっている茅場が多く見られる。ケイ酸カリウムの施肥試験の成果を踏まえ、今後も継続的な調査を行い、検証することで、茅の質の向上と茅場の持続的生産に寄与したい。
- 2 茅葺きコミュニティの構築 集落単位では難しくなった茅刈り、茅葺きの共助のため、今回のワークショップ参加者によって生まれつつあった、関東圏での茅葺き所有者、利用者を中心に、新たな茅葺きコミュニティの構築につなげたい。
- 3 里山農業と茅葺き 地域の有機農家や果樹農園などと茅葺き民家を繋ぎ、古茅や茅くずを肥料利用するなど、茅の多面的、循環的利用を促進し、農業と茅葺きの連関を取り戻していきたい。

◆ 事業名「あなたの時間を有効に、伝統文化継承請負人になりませんか」 第2回茅刈後継者養成講座

事業団体	特定非営利活動法人 文化遺産 保存ネットワーク河内長野
活用したふるさと文化財 の森	岩湧山茅場
活用したふるさと文化財 の森センター	滝畑ふるさと文化財の森セン ター
活用した文化財建造物	重要文化財左近家住宅 登録文 化財天野山金剛寺本坊大玄関

■事業の目的

修理用資材(カヤ・檜皮)の確保に対す
る地域での支援体制づくり
修理用資材(カヤ・檜皮)に関する効果
的な普及啓発手法の開発

■事業の内容

(1)金剛寺大玄関修理見学会

■日時：令和3年11月7日(日)13時00分～15時00分

■会場：天野山金剛寺(大阪府河内長野市)

■共催・協力：天野山金剛寺・河内長野市立千代田公民館

■同時開催事業：

■対象：茅刈従事希望者・公民館講座参加者・一般

■参加者：60名

■内容：登録文化財金剛寺大玄関修理の設計者の解説により修理現場で檜皮・瓦屋根解体状況を見
学した。また、修理現場そばに仮設テントを設営して、「匠の技に触れる」と題して7名の伝統技法を保持す
る職人による檜皮つくろいの実演なども公開し、文化財、とりわけ文化財の修理用資材の育成・採取・加工
の重要性に係る普及啓発を行うことができた。



受付



修理現場見学の事前説明



修理現場での見学風景



「匠の技に触れる」(実演)会場

(2)茅葺建造物見学

■日時：令和3年12月5日(日)8時45分～15時30分

■会場：岩湧山茅場・滝畑ふるさと文化財の森センター茅倉庫

■共催・協力：滝畑地区自治会・河内長野市立千代田公民館

■同時開催事業：

■対象：茅刈従事希望者、公民館講座参加者

■参加者：9名、関係者6名

■内容：

当日は、好天に恵まれ参加者9人及びNPO法人関係者が賃借りタクシー4台に分乗して、岩湧山茅場ま
で順調に到達した。

・午前10時過ぎから正午前までの約2時間、茅場南側斜面裾部付近の茅を刈り、束ね、運搬する一連の
作業をNPO職員が講師として、参加者全員が実習した。

◆ 事業名「あなたの時間を有効に、伝統文化継承請負人になりませんか」 第2回茅刈後継者養成講座

・正午から約1時間の昼食の後、午前中の実習を引き続き行い、32束の茅を刈り取り、借用した軽トラックに積み込み、15時前に滝畑ふるさと文化財の森センター茅倉庫に搬入した。
・茅搬入車と相前後してタクシーに分乗して滝畑文化財の森センター茅倉庫に到着した一般参加者は講師であるNPO職員から茅の保管方法を実習するとともに供給先や活用例、茅場の継続的な維持管理の継承の意義などについての説明を受け、15時半頃に解散した。



刈取り方法の説明



茅刈り取実習



茅刈り取実習



茅倉庫の説明

■事業の成果

- 今回の講座参加者で、茅刈り作業従事希望者は2名あった。
- 今回は、現茅刈従事者も研修会として参加し、技術向上に寄与した。
- 公民館が生涯学習事業として「岩湧山頂の茅の育成と保存」の講座を企画し、当事業との連携事業として実施した。このことから、普及啓発時事業の実施形態に広がりができた。

■事業の実施後の課題

- 茅刈り後継者養成講座については、成果として従事者を確保することができている。しかし、修理見学会を事業に組み込み一般の方の参加機会を企画しているが、やはりその趣旨からか講座参加者が少ないのが課題である。
- 昨年度と同様、コロナ禍が継続する中で事業中止に至ったものもあり。事業開催の判断が難しかった。今後も三密を避けての開催に留意しなければならない。

■今後の展開

- 当初計画では、茅刈後継者養成講座を3回実施する予定で、来年度は最終年度となる。次回も一人でも従事者希望者が増えるように事業を実施したい。
- 生涯学習資源としても位置づけ、公民館事業と連携し、普及啓発の事業形態の幅を広げる。

◆ 「文化遺産から学ぶ漆」 普及啓発事業

事業団体	日本うるし掻き技術保存会	■事業の目的
活用したふるさと文化財の森	浄法寺漆林	・ 修理用資材の確保に対する支援体制づくり ・ 修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発 ・ 修理用資材の育成・採取・加工に関する活動 ・ 修理用資材の育成・採取・加工に関する担い手の確保 ・ 修理用資材の育成・採取・加工に関する他組織との連携・情報共有
活用したふるさと文化財の森センター		
活用した文化財建造物	日光東照宮※、二荒山神社※、日光山輪王寺※、八葉山天台寺 ※新型コロナウイルス感染拡大の影響により活用断念	

■事業の内容

(1) 縄文時代から現代における漆の活用方法を学ぶワークショップ

①漆関連ツアー「浄法寺漆＆御所野縄文」

実施日 令和3年10月31日（日）

参加数 16名（一般募集）

行程 盛岡駅＝天台寺（見学）＝浄法寺歴史民俗資料館（見学）＝ふるさと文化財の森（漆林・漆掻き見学）＝天台の湯（昼食）＝御所野縄文博物館（見学・漆ろうそくづくりワークショップ）＝なにやーと物産センター（買い物）＝盛岡駅

講師 漆掻き職人 千葉 裕貴 氏（漆掻き実演）

その他 アンケート実施

②漆関連イベント「浄法寺漆×御所野縄文～縄文時代と現代をつなぐ漆」

実施日 令和3年11月6日（土）～7日（日）

参加数 約200名（一般募集）

場所 御所野縄文公園（岩手県一戸町）

概要：漆がついた出土品が確認された御所野遺跡において、漆掻き実演やワークショップ、同遺跡出土品を通じ縄文時代から現代へ続く生活を支えてきた漆の魅力をPRする。

内容：①漆掻き実演

②漆蠟を使ったキャンドルづくり体験

③漆のストラップ艶出し体験

④パネル等展示



御所野縄文遺跡見学



漆蠟キャンドルづくり体験



漆掻き体験

◆ 「文化遺産から学ぶ漆」 普及啓発事業

(2) 漆掻き技術のPR及び漆を知るワークショップ 【コロナの関係により中止】

- 実施日 令和3年9月25日（土）～26日（日）
令和4年2月5日（土）～6日（日）※振替日程
- 会場 日光東照宮、二荒山神社、日光山輪王寺
- 目的 浄法寺漆の最大供給地である日光東照宮他において、浄法寺漆の採取方法や活用方法などの知識のほか、漆掻きの実演やワークショップを通じて、日本の歴史と文化を支える文化財建造物の保護における漆の役割などを来場者に対してPRする。
- 内容 ①漆掻き実演、②ワークショップ（金箔押し、漆椀塗、漆のストラップ艶出し体験）
③PR動画放映、④道具等展示によるPR

(3) 保存修理現場見学 【コロナの関係により中止】

- 実施日 令和3年9月27日（月）
令和4年2月7日（月）※振替日程
- 会場 日光二社一寺内保存修理現場
- 目的 保存修理現場見学や修理を行う漆塗り技術者と修復に適した漆の品質等について、情報や意見交換を行い、漆掻き技術の向上につなげる。

■事業の成果

●漆関連ツアー、イベント・・・ ツアー参加者のほとんどがふるさと文化財の森について聞いたことがないと答えていたが、本ツアーを通じて理解を深めることにつながった。募集定員を上回る多数を応募があり、漆への興味が高まっていると感じることができた。単なる観光ツアーではなく、漆を軸とした学びと体験のコンテンツが満足いただけるものであったと感じる。

漆関連イベントでは、縄文時代から人々の生活に漆が関わっていることを広く周知することができた。また、漆は文化財修復等樹液の活用方法以外に、現代では珍しくなった漆ロウソクなど幅広い活用方法があることなど広く周知する良い機会となった。

●漆掻き技術のPR及び漆を知るワークショップ・・・ イベント開催地である栃木県における新型コロナウイルス感染症感染拡大による緊急事態宣言の発令を受け中止とした。展示パネルや配布予定のリーフレットは漆関連施設や観光施設において展示及び配架し普及啓発に努めている。

■事業の実施後の課題

新型コロナウイルス感染拡大により事業の延期や中止、規模縮小による実施せざるを得ない状況であり、集客を伴うイベントの実施の難しさを感じている。

また、漆掻きのシーズンである6月から11月は、早朝から日暮れまで一日中漆掻きに從事しており、見学対応には漆掻き作業を中断しなくてはならず、生産量は所得に直接影響することから、見学希望者へ職人自ら対応することが困難な状況である。対応可能な人材の育成を含めた受け入れ体制の整備について、行政や観光団体と協議検討を行う時期に来ていると感じる。

■今後の展開

令和2年6月に、二戸市と八幡平市に流れる安比川流域における漆文化が日本遺産に認定となり、同年12月には、当会が保有する漆掻き技術を含む「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。

また、二戸市に隣接する御所野縄文遺跡や青森県八戸市の是川縄文遺跡は「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして令和3年7月に世界遺産に登録された。両遺跡からは漆がついた土器の一部が出土するなど漆との関りが深いことから、世界遺産や日本遺産の各事業と連携しながら、ワークショップやツアーなどを通じた普及啓発を検討する。

◆ 森が支える日本の技術 2021 公開セミナー

事業団体



公益社団法人
全国社寺等屋根工事技術保存会

活用したふるさと文化財 の森センター

京都市文化財建造物保存技術研修
センター

活用した文化財建造物

清水寺(境内)
日吉大社(境内)

■事業の目的

檜皮葺や柿葺、茅葺など古来から伝わる伝統的屋根工事技術は我が国が世界に誇る文化であり、これらの技術を後世に継承することが伝統技術を保存する団体としての責務だと考える。そのためには、より多くの国民の理解を得るために知ってもらうことが重要です。文化財建造物保護のために必要な植物性資材の材料作成及び使用方法(技術)や人材(技術者)の育成を中心に保存技術について広く一般の方々を対象に普及啓発を図り、当該事業を通じ、文化財保護における資材・技術の重要性と、知識の習得の場を提供することを目的とする。

■事業の内容

(1)開催プログラム

1 檜皮採取実演：一般参加者対象

日 時：令和3年11月7日(日)10:00～15:00
場 所：日吉大社 境内林(滋賀県大津市坂本5-1-1)
内 容：当会檜皮採取指導員による技術の実演
協 力：日吉大社

2 資材確保への取組(パネル展示)：一般参加者対象

日 時：令和3年11月6日(土)9:30～16:00
場 所：京都市文化財建造物保存技術研修センター
内 容：(公社)全国社寺等屋根工事技術保存会がこれまで行ってきた資材確保の取組とその資材の重要性を紹介。

3 資材を育む研修(森林整備:除伐)：文化財修理経験者対象

日 時：令和3年12月8日(水)13:30～15:30
場 所：嵐山国有林(京都市右京区)
講 師：林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所
森林管理官3名
内 容：人と自然が作り出す四季折々の野山を広く世界の方々に楽しんでいただくため、紅葉する木を育てる。下草、雑木を刈り、風通しの良い環境を作り木の育成をするための管理・維持していくことの意義を学ぶ。

4 文化財講座：一般参加者、修理技術者対象

日 時：令和3年11月6日(土)10:30～12:00
場 所：京都市文化財建造物保存技術研修センター
講 師：日塔 和彦 氏
内 容：「世界の茅葺技術～ヨーロッパを中心として」

(2)「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～

植物性の資材で葺かれる伝統的建造物を支えるための技術を紹介

日 時：令和3年11月6日(土)10:00～16:00
場 所：清水寺境内特設テント
対 象：一般参加者
内 容：檜皮葺きとその材料成型、屋根板の加工の実演



檜皮採取実演



パネル展示



森林整備:除伐



文化財講座

◆ 森が支える日本の技術 2021 公開セミナー

(3)リーフレット等広報物の配布

清水寺は国内外を問わず多くの観光客が訪れる。本年度は新型コロナウイルスの影響もあり海外からの旅行者はほぼないことが予想され、国内の観光客を対象に、日本版のリーフレットのみ配布する。さらに会場内にモニターを設置し、技法紹介のDVD上映も行う。



清水寺境内特設テント

(4) SNSを利用した広報の実施

SNSを活用し、各種プログラムの広報にはネット媒体を使用して実施することで、文化財に関心をもつ人材の掘り起こしと、文化財を後世に残すための技術と資材確保のための取り組み、その活動の重要性を一般の方々に紹介する。

■事業の成果

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、事業内容を縮小して行うこととなりました。

そんな中、清水寺や日吉大社での実演は大変意義のあるものと感じています。映像ではなく実際の作業を見て頂くことはやはり伝わり方が違い、記憶に残ると思います。檜皮葺の気の遠くなるような地道な手仕事の世界、木を手の感覚で薄く剥ぐ板割、採取の実演も一目瞭然でまさしく命がけの作業。このような技術があるからこそ文化財が維持されていることを知って頂くため、今後も引き続きこの事業を続けていきたいと考えております。

■事業の実施後の課題

(1)プログラムの内容について

自然はどんな厳しい状況でもこくこくと歩み続けますが、私たちも共に歩まねばなりません。もっと意識の向上に繋がれるように今後は見直せるところは見直し、取り入れることは大胆に取り入れていきたいです。天候に左右されない事業の実地を視野に入れながら、来年度以降の実施内容を検討したい。

(2)場所の課題について

日本を代表する古都京都で事業が行われることは今後も望ましいが、場所が使えないときの対応も考えなくてはならない。

(3)広報の課題について

今後はセミナー以外にも活用し、他の事業内容や普及啓発の取り組みなどを発信していく媒体として育てていきたいと思う。若年層への訴求はやはりSNSを使った広報が効果的かと思うので地道に取り組んでいきたい。また、昔ながらのポスターや紙面での広報も味があり、引き続けていきたい。

■今後の展開

来年度以降も本筋は変わらず続けていきたいと考えています。少子高齢化の進む今、小学生や、中学生を対象に普及啓発できないものか、また高校・大学についても同じである。次の世代にどう繋がれるかが一番の課題であると考えます。やはりネットを使った発信は大きな流れになることと感じています。ZOOMやバーチャルの活用で世界から多くの参加を募ることも面白いかなと感じます。しかしどんな時代になっても対面での普及啓発に勝るものはありません。清水寺会場での実演は大きな成果だと感じています。これらのことを関連付けながら発信することを考えていかなければならないと思います。